

◆技術改良試験

シラヒゲウニ地蒔き式養殖試験Ⅳ

水産業改良普及センター 與那嶺盛次

1. 目的

シラヒゲウニ(以後ウニとする)は、本県ウニ漁業唯一の対象種であるが、近年乱獲等により資源が減少し市場価格が上昇している。ウニの種苗生産技術や養殖技術は県栽培漁業センターや県水産試験場で開発され普及に移されている。

そこで、昨年度に引き続き県栽培漁業センターの協力を得て具志川磯根資源活用研究会と種苗生産を行い、その種苗を用いて2回の地蒔き式養殖試験を実施した。

2. 材料及び方法

第1回試験に使用したウニ種苗は、具志川磯根資源活用研究会の簡易種苗生産施設で生産した平均殻径37.7mmの723個であった。試験場所は、地蒔き式養殖の漁業権が取られている具志川地先のホンダワラ藻場の沖に向かって右側の海域であった。

養殖期間は、平成20年6月5日から平成21年6月8日までの368日間であった。養殖期間中6回、毎回各50個体の殻径を測定した。

第2回試験に使用したウニ種苗も同様に生産した平均殻径32.1mmの4,100個であった。試験場所は第1回目放養した海域の沖側に平成20年11月30日に放養した。第2回試験は現在も試験中である。

3. 結果及び考察

第1回試験では、平均殻径37.7mmのウニ種苗が約1年間で平均殻径80.6mmに成長して出荷サイズになった。冬季の期間が含まれているため成長が遅くなったと思われる。取り上げ数は、302個で生残率は41.7%であった。

取り上げた302個を生ウニ加工業者をとおして県漁連市場に出荷した。生ウニは、39パック(1パック100g)であった。県漁連セリ価格は平均716円/パックであった。

取り上げ前の平成21年5月28日、10個体(平均殻径79.2mm)の身入りを測定したところ平均22.9gで、品質も良好であった。他地域からの出荷量も多かったため安くなったと考えられるので、出荷時期について検討する必要がある。

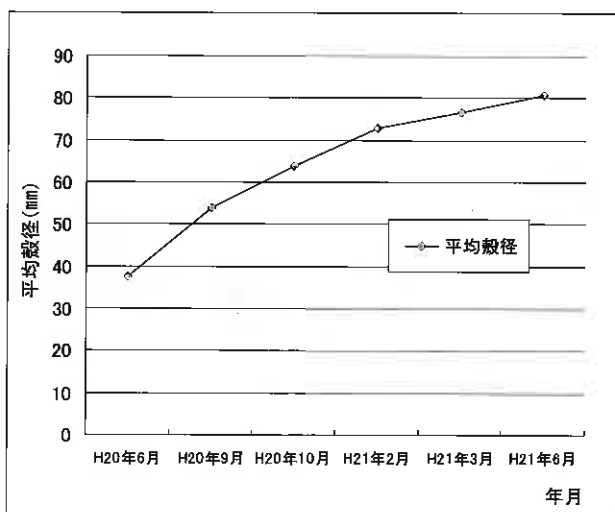


図1 地蒔き式養殖シラヒゲウニの成長

第2回試験で放養したウニも順調に成長しているので、平成21年8月から取り上げを実施する予定である。具志川地先のホンダワラ藻場は、数種類のホンダワラ類が周年をとおして繁茂しているため、良好な身入りが期待できる。

4. 今後の課題

今後は種苗生産の安定を図り、出荷時期や出荷方法の検討も行いたい。



①シラヒゲウニ簡易種苗生産施設



②中間育成中のシラヒゲウニ種苗



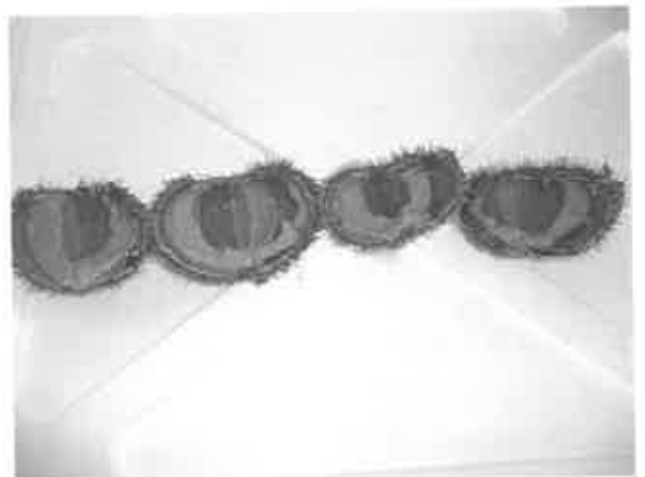
③地蒔き式養殖試験海域



④養殖試験場所のホンダワラ藻場



⑤取り上げた地蒔き式養殖ウニの一部



⑥取り上げた養殖ウニの身入り